

# 沖縄諸島土器編年におけるナガラ原東貝塚の土器

宮城 弘樹  
名護市教育委員会  
安座間 充  
金武町教育委員会

MIYAGI Hiroki  
Board of Education Nago City  
AZAMA Mitsuru  
Board of Education Kin Town

## 1. はじめに

沖縄貝塚時代後期の在地土器は、大別して尖底土器群（無文尖底様式）、平底土器群（平底様式）に分かつことができる。このことは長い学史的経緯のなかで確立された様式概念である。この二つの土器様式群に対する理解は、概ね弥生～古墳時代並行とされる貝塚時代後期前半期に尖底土器群が、後半期（前者に後続する時期から古代並行期）に平底土器群が充てられており、現在おおよそ支持される編年的枠組として通用している。

さて、ナガラ原東貝塚出土土器が該期沖縄諸島の在地土器編年においてどのように位置づけられるのか。先に結論を述べるが、ナガラ原東貝塚出土土器は、冒頭で触れた尖底土器群と平底土器群の様式交代期を包括してある一定の時間幅をもって堆積した包含層と推される。

本論では、尖底土器群から平底土器群への型式変化が起こった際の土器様相の実態についてナガラ原東貝塚出土土器を基礎資料としながら沖縄諸島にみる類例資料を確認し、この様式交代期の土器様態に迫ることにより沖縄貝塚時代後期文化の実際の把握に寄与することを目的とする。

## 2. 尖底土器群と平底土器群の時間的空間的理解

尖底土器群はこれまで数多の型式設定をみるが、新里貴之が提示した編年案（新里<sub>註</sub>1999）で概観していききたい。貝塚時代後期前半の尖底土器群の祖形に仲原式土器がある。仲原式も尖底だが、貝塚時代中期の土器型式と理解されるため、本論では阿波連浦下層式、浜屋原式、大当原式の3型式を貝塚時代後期の尖底土器群とする。これら尖底土器群に伴う搬入品は九州から招来されたものが多い。九州系弥生土器が大半で、九州南部地域の所産が主勢を占めており、時期的には弥生時代中期前半の土器が最も多い（安座間2000・中園2004・ほか）。九州出土の南海産貝輪出土遺跡跡・個体数とも整合的である。

沖縄諸島地域にみる九州系弥生土器の出土量は弥生中期後半以降減少し、弥生時代後期には極端に少ないが、弥生土器の影響を受けた奄美諸島系土器（いわゆる弥生系土器）や特徴的な貼付突帯文をもつスエン當式土器の出土があり、奄美諸島地域との土器動態の並行関係を理解する上で注目される（上村・本田1984、新里<sub>註</sub>2000、高梨2006）。

平底土器群は、沖縄諸島地域ではアカジャンガー式土器、フェンサ下層式土器の2型式が、奄美諸島地域では兼久式土器が既往の土器型式として認知されている。クロスデーティングによる時間的考察に有効な搬入土器は平底土器群の時期にはほぼ皆無だが、開元通寶等の搬入品が得られている。沖縄諸島の遺跡にみる尖底土器群と平底土器群の先後関係は、平敷屋トウバル遺跡（Ⅳ・Ⅴ層⇒Ⅱ層）、具志川島遺跡群西地点（へⅢ中地区ⅩⅣ・ⅩⅠ層⇒Ⅹ・Ⅸ層⇒Ⅷ・Ⅶ層）などの層位的出土状況から、尖底土器群⇒平底土器群という先後関係が証明されている。

時間軸上の「タテ」的な関係に続いて、空間的ないわば「ヨコ」的な拡がりはどう理解できるだろう

うか。尖底土器群の主たる分布圏は沖縄諸島地域にほぼ限られ、奄美諸島の在り土器様相についてはまだ不詳な部分もあるが、九州南部系弥生土器の影響を受けた土器やスセン當式土器など沖縄諸島地域とは一線を画せる土器様相にあったと理解される。沖縄諸島・奄美諸島ともに在り土器は型式変化し、やがて共通性の高い平底土器群が現出する。沖縄諸島のアカジャンガー式と奄美諸島兼久式に文様など類似・共通の要素も多く認め、アカジャンガー式土器の成立に奄美兼久式の影響をみる意見もある（池田1999）。なお後者の兼久式土器については近年多くの検討がなされており参考になる（高梨1999・2005・2008、中村2006、中山2006）。

### 3. ナガラ原東貝塚の土器群概説

ナガラ原東貝塚出土土器について該当型式別に述べていく。なお、本稿中では本遺跡出土の土器の表記を第Ⅰ部の表記にならぬ以下のようにし、（ ）内に入れて示す。第1次調査報告書の20番の土器：1-20

#### 3.1. 搬入土器またはその影響が考えられる土器群

当該資料に関しては新里貴之や中村直子が詳述しているが、ナガラ原東貝塚から得られた土器群の構成を理解する上で重要と思われるためここでも簡単に触れておきたい。

図1-1（1-20）は、破片資料でもあり断定は難しいが、弥生時代並行の奄美諸島系土器の可能性が考えられる。口縁部断面観にみる形態的特徴から、時期的には弥生時代前期末～中期前半の入来式土器あたりか。

図1-2（5-36）は、刻目をもつ横位突帯文胴部片で報告されるが、胎土混入物等の観察から奄美諸島系の可能性があり、あるいは縦位の貼付突帯文を付したスセン當式の可能性も考えられる。

図1-3・4（6-12 図-54、同図-55）は、九州南部地域古墳時代の土器とみられる搬入土器で甕もしくは壺の口縁部資料である。

図1-5（8-14 図-25）は、貼付突帯文や口縁部付近の器形的特徴からスセン當式土器との類似点を指摘することができる。しかし、胎土混入物や器面調整はいかにも沖縄諸島在り土器である大当原式と共通しており、奄美諸島スセン當式土器を模した沖縄諸島の在り土器と推察される。

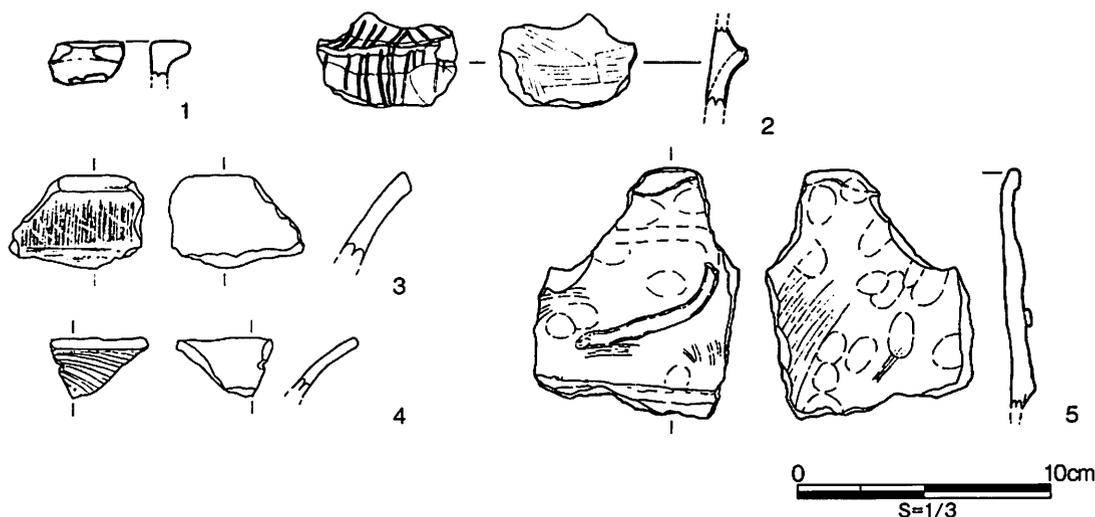


図1 ナガラ原東貝塚出土土器にみる搬入土器、搬入土器の影響が考えられる土器

### 3.2. 尖底土器群

これまで筆者らは貝塚時代後期の在地土器編年について言及してきた（宮城1997・2005、岸本ほか2000、宮城・安座間2002）。このなかで貝塚時代後期前半期の尖底土器群について、従前の発掘調査情報の蓄積や土器研究を踏まえ、宮城（1997）は、渡嘉敷島阿波連浦貝塚（Ⅳ層⇒Ⅴ層）、久米島大原第2貝塚B地点（Ⅴ層⇒Ⅲ層）の層位的出土状況から「阿波連浦貝塚第Ⅵ層土器群」⇒「浜屋原式土器」⇒「大当原式土器」の先後関係が実証可能と指摘した（図2参照）。そして、この三者について概念整理及び遺跡間の資料比較検討によりその先後関係や並行関係など編年の考察をした<sup>(1)</sup>。

以下、沖縄諸島の在地土器である尖底土器群について宮城の編年案（1997）やこれを包括的に整理した新里貴之（1999）の「阿波連浦下層式」「浜屋原式」「大当原式」について概観する。

**阿波連浦下層式土器** 器形的特徴に九州系縄文晩期の黒川式土器との類似性が指摘され（中村1988）、縄文時代晩期並行を連想させる。筆者らの実見では当該型式とみられる資料は見出せなかった。

**浜屋原式土器** 浜屋原貝塚群出土土器c類（もしくはⅢ類）を標識とする（宮城ほか1977）。他の型式に比べて早くから弥生時代並行の在地土器として用いられていたが（木下1989、呉屋1989）、当該型式の実際的内容がより明らかになったのは久米島大原第2貝塚B地点の発掘調査である（盛本1994）。

外器面の丁寧なナデ調整に対して内器面調整は粗雑で成形時の指頭痕が残り凹凸が目立つ点が特徴的である。混入物にガラス質黒色粒を含む。主要器種たる深鉢は乳房状尖底に直口器形が代表的である。久米島大原第2貝塚B地点、大度貝塚は当該型式の単純出土の良好な例だが、当該型式の類例資料をみると、器形や胎土・混入物、器面調整、器壁の厚さ等の各属性に異なる特徴を認められ、殊に沖縄本島北部地域では器形のバリエーションに富み、九州南部系弥生土器の影響を認める奄美諸島系土器と類似の特徴をもつものもある。宇佐浜B貝塚、具志堅貝塚、部瀬名貝塚などはその顕著な例に挙げられる。一方、器形のバリエーションは乏しく胎土・混入物は久米島大原第2貝塚、大度貝塚出土土器と一線を画する例として伊江島阿良貝塚出土土器がある。なお、浜屋原式土器の時的的位置としては弥生中期中葉～中期後半段階の九州南部系弥生土器（入来Ⅱ式～山ノ口式）、その属性採用を認める奄美諸島系土器との共伴関係からおおよそこの時期と考えられる。

図3-1（7-14 図-30）は、浜屋原式の可能性がある胴部片である。泥質の緻密な胎土に明橙色の

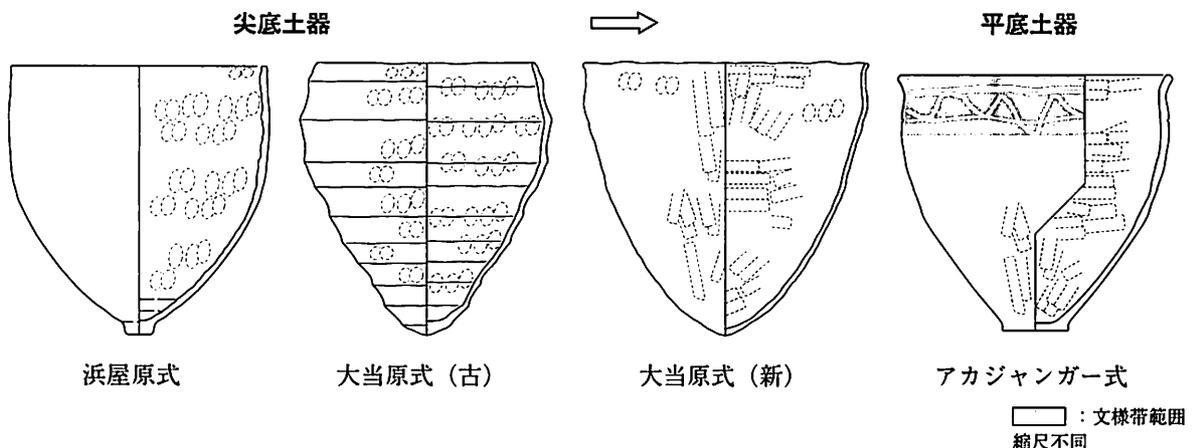


図2 貝塚時代後期の沖縄諸島在地土器型式模式図

器色は大原第2貝塚出土土器などの典型的な浜屋原式とはやや異質な印象受けるが、器外面のナデ調整の徹底と対照的に内面調整は粗雑で指頭痕の凹凸が残る点などは、本遺跡と同じ伊江島内阿良貝塚出土土器に近似している。

なお、器面調整は相対的に丁寧なナデ、かつ沈線主体文様を施すため、一見アカジャンガー式段階の平底土器群との共通点を見出すこともできるが、浜屋原式及び後続型式の大当原式にしばしば伴う有文土器がありこれと同類と目される。ナガラ原東貝塚出土の表裏面有文土器及びこれに類する口縁部資料図3-2～3（1-29・6-38）は、例えば瀬底島アンチの上貝塚出土の全形が窺える小形甕の図3-15（本部町教委編2004：23 図-55）と類似する資料と考えられ、今回得られたのは口縁破片資料だが、乳房状尖底になることが確認されている。かつて宮城が整理した「表裏面有文土器」（宮城1998）の一群として捉えられ、現在知られる典型的な浜屋原式や大当原式土器と並行する土器群と推される。他にも表裏面に施文する図3-5（6-36）などもやはりアンチの上貝塚に類例を見出すことができ、図3-16（本部町教委編2004：23 図-62）の資料を例示した。このような資料は、散見的ながらも尖底土器群が主勢を占めるものと筆者は理解している。また、施文対象は外面に限られるが、器壁にやや厚みを持つ図3-4・6（7-7・1-40）などもこれに類する資料と捉えられる。

**大当原式土器** 浜屋原式土器に後続する土器型式であり、大当原貝塚出土土器を標識とする。当該型式については、幾つかの細分案も示されるが総じて型式分類に足る属性的特徴に乏しく、一致する見解に至っていない。筆者は、大当原貝塚A地点の上層（Ⅲ層）において「厚さが均一でナデは比較的徹底した土器」が、下層（Ⅴ層）から「造りが粗造で粘土接合痕の明瞭な無文の鉢形土器」が出土し、型式学的変化の方向性（下層タイプ→上層タイプ）が層位的重量をもって確認されたこと（高宮ほか1993）に拠り、以下のような編年観をもつ。第一に胎土は砂質から泥質主体に、器壁も厚手から薄手へと推移すること。第二に直口器形から外反器形が占有的に、乳房状尖底から砲弾状尖底へと移行していく器形プロポーションにみる変化の方向、第三には無文主体ではあるが有文土器の比率も次第に増えていく傾向をみている。沖縄諸島の遺跡出土資料でみると、阿波連浦貝塚Ⅳ層（底端に平坦面をもつ乳房状尖底）→大当原貝塚下層（やや丸く厚ぼったい乳房状尖底）→清水貝塚（砲弾状尖底）という型式的な変化の方向性を推測している（図2参照）。大当原式土器の年代的位置については、弥生時代後期～古墳時代の九州系搬入土器（免田式土器長頸壺、成川式土器）、後漢鏡、九州系搬入土器の影響を受けた奄美諸島系土器、広田下層タイプ～上層タイプ貝札がクロスデーティングの上で有効な共伴資料として挙げられる。また、新里貴之は大当原式土器段階にみられるミニチュア土器も九州南部地域の古墳時代成川式土器においてミニチュア土器が増加する傾向と連動的なありかたとして着目している（新里2008）。加えて、近年、奄美諸島スセン當式土器類似資料の出土事例も複数認められ、その並行関係が想定できる。

図3-7～9（4-26・5-31・1-37）などは、直口器形に舌状口縁、口径に最大径が位置し、内外面調整が粗雑な特徴から大当原式土器に該当するものと考えられる。但し、大当原式は口唇端部が舌状になるものばかりでもない。口唇端部を平坦に整えた後に刻目を施すケースもある。この場合の刻目は概ね間隔がやや広く施文工具も大振りで連続的になることから波状口縁の外観を呈する。典型的な事例として器全体をうかがえる資料を多出したナガラ原西貝塚の資料は参考になる。

図3-10（3-31）は、大当原式土器が主勢となる他の遺跡でよくみられるため当該型式の要素とみなせるが、器面調整などは大当原式的様相を観取しながら文様要素に後続のアカジャンガー式土器との共通性を認める。

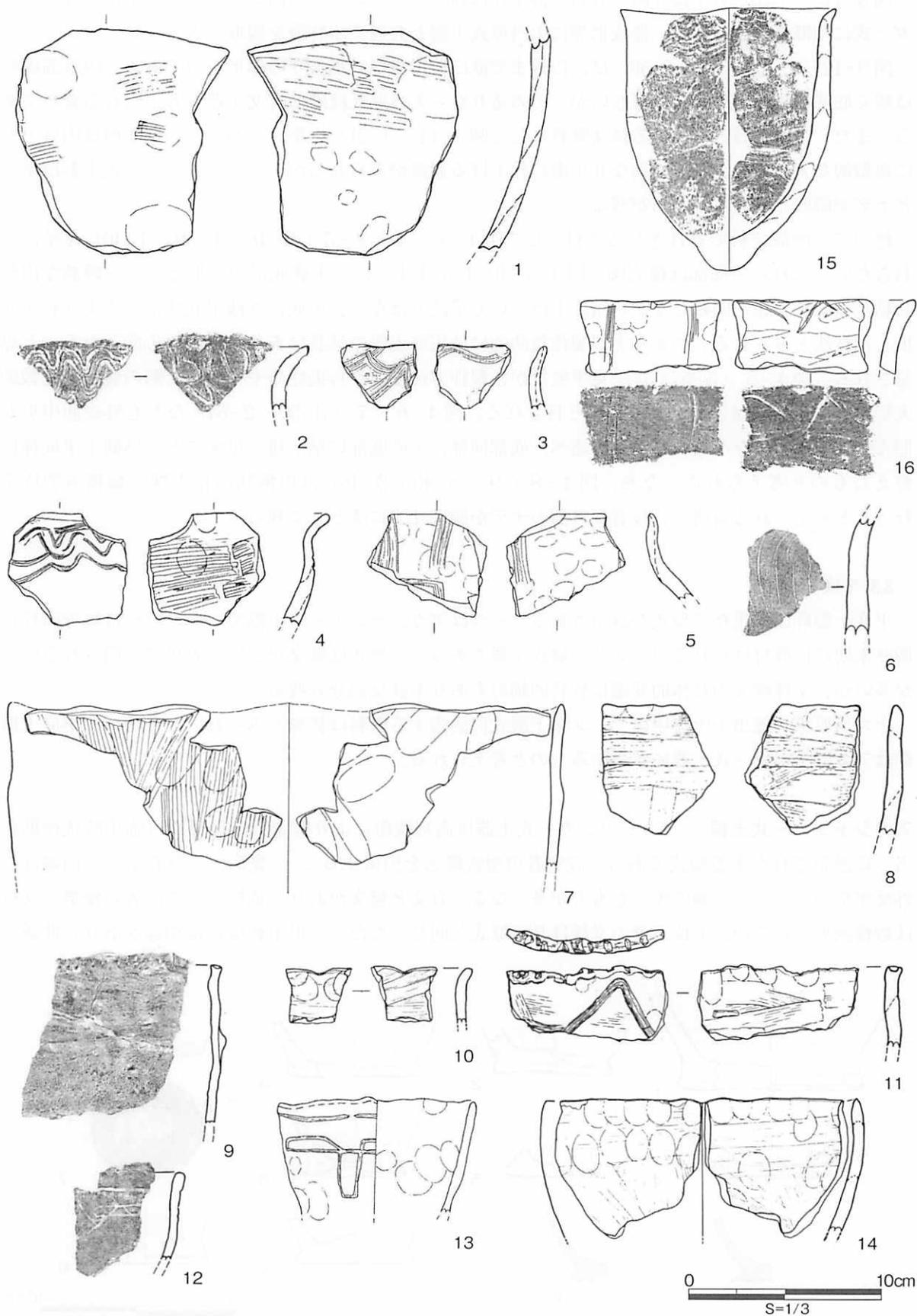


図3 ナガラ原東貝塚出土の尖底土器群（1-14）及び類例資料（15・16）

図3-11(5-10)もやはり断片資料で器全体は判然としないが、器面調整や文様要素にアカジャンガー式に類似性を認めるが、器成形等に大当原式土器と共通する特徴を観取できる。

図3-12(1-32)、13(6-39)は、口縁まで直口器形でやや小振りの鉢形土器である。内外面調整は粗く底部を欠くため断定は難しいが、その造りから大当原式段階の有文土器と考えられる資料である。また、当該資料と類似する無文資料として図3-14(3-21)を挙げておきたい。器面は内外ともに典型的な大当原式土器とは異なり平滑に仕上げる意識がみられるが、アカジャンガー式土器段階ほどナデが徹底しておらず凹凸が残る。

続いて、底部資料で着目される資料として図4-1~4(2-57・3-48・1-59・4-40)を挙げておきたい。これらの底部は模式図(図4-a・b)に示すように、平底底部の成形として一般的な円盤状粘土板に粘土紐を回転しながら積み上げていく手法ではなく、尖底に外観平底状になるよう粘土充填した技法とみられる。つまり土器製作技法的には尖底土器の延長にあり、平底を志向したものと思量される。図4-5(5-57)は一見平底だが、製作方法などから尖底のやや潰れた形の資料で比較的大形の鉢形土器に付される底部資料と目される。図4-6・7(3-50・2-54)なども外底面中央が凹んだ上げ底状になっており、先に述べた底部同様、尖底底部に粘土紐を足すことで外観上平底様に整えたものと考えられる。なお、図4-8・9(5-40・3-46)は円盤状の粘土塊に輪積み製作を行ったと考えられる資料で、後者は外面のナデが徹底せず溝として残る。

### 3.3. 平底土器群

平底土器群は、現在二型式が設定される。一つはアカジャンガー式土器で、あと一つは貝塚時代後期終末期に位置付けられるフェンサ下層式土器である。二型式は無文化という表現で説明される場合が多いが、文様構成の具体的変遷は資料的制約もあり不詳な部分も残る。

ナガラ原東貝塚出土土器中にフェンサ下層式に該当する資料は皆無とみられ、ここでいう平底土器群はアカジャンガー式土器に該当するものと考えられる。

**アカジャンガー式土器** アカジャンガー式土器は高宮廣衛により暫定編年後Ⅲ期(弥生時代後期相当)に設定された土器型式である。設定者の型式概念を引用すると、「甕形、くびれ平底。口縁部の外反がやや強くなり、胴の脹らむものが多くなる。有文と無文があり、依然として後者が優勢。文様は数種認められるが、上位三種の文様は具志原式と同じ。ただし、出土頻度には相違があり、曲線文、

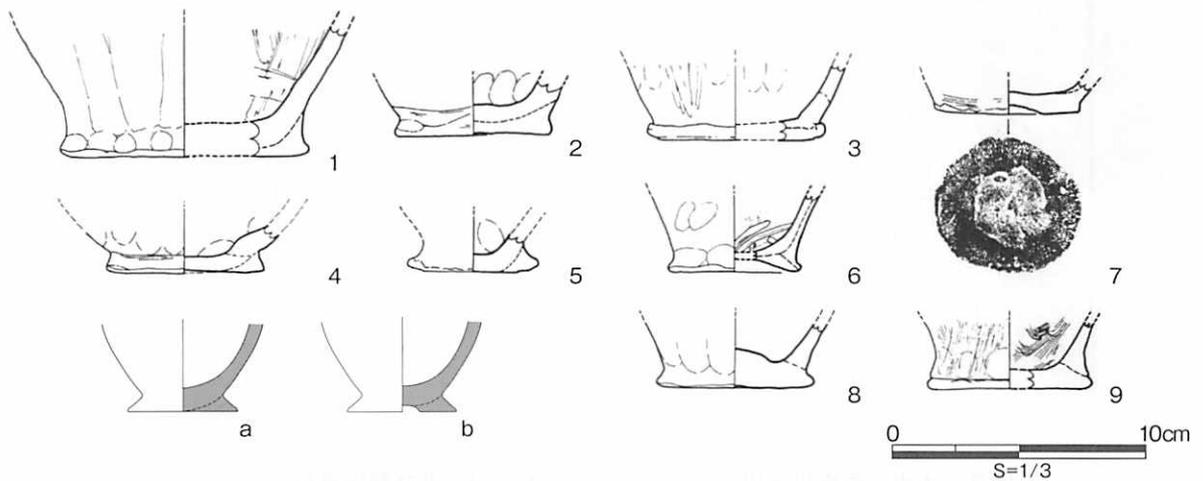


図4 尖底土器製作技法の延長で製作されたとみられる平底土器(ナガラ原東貝塚)

凸帯文が優勢。曲線文は山形連続文の形をとるのが特徴。奄美諸島の兼久式、南九州の成川式に並行する土器とみられる。」(高宮廣1978)

標識資料であるアカジャンガー貝塚出土土器にみる文様構成のバリエーションは、後年に沖縄諸島の他遺跡で得られた当該時期の土器ともほぼ共通する内容だが、標識遺跡の文様分類(高宮1960)に従い再点検すると、量的に主勢となる文様構成に遺跡間で差違も認められ、文様構成の編年的検討を試みる余地もあると考えられる(安座間2001)。アカジャンガー式土器の時間的考察については、過去資料にみる共伴関係の事例として、開元通寶及び広田上層タイプ貝札が複数の遺跡で報告<sup>(2)</sup>されており、開元通寶の初鑄年 A.D.621年が上限年代の参考として考慮できよう。一方の貝札についても、近年の型式学的検討に拠れば上層タイプは古墳時代後期～終末期段階に位置付けられている(矢持2003)。これらを勘案して、当該型式の帰属年代観は6～7世紀代を含むことを一つの参考としておきたい。

尖底土器群大当原式土器の最末期の特徴と平底土器の最初期の特徴は未だ詳らかにし難い。両者を分かつ型式学的な特徴として次の2点を可能性として指摘しておきたい。

1点めは、器形をうかがい知る特徴の一つ、尖底で口縁部に最大径があるものは大当原式、平底で胴が張り口縁部を外反させるものがアカジャンガー式もしくはそれに近い段階の土器になると推量する。しかし、実際には口縁だけでは分類(型式同定)が難しいものも多く、いわゆる判然としないグループは全て両土器型式の過渡期の一群として包括的に扱われる懸念がある。

2点めは、アカジャンガー式は有文の比率が高いことが指摘されることから、文様を特徴の一つとして挙げることができるだろう。文様構成を子細にみれば、突帯と沈線を施す大当原式に対し、刻目の区画突帯文はアカジャンガー式段階以降に認める文様要素と筆者は理解している。

以上に述べた2つの特徴(傾向)を整理すればナガラ原東貝塚で分析された数的傾向(柴田2010ほか)からも十分に理解されるものである。ただ、型式設定にみる概念を整理したものであり、実際に遺跡から得られる断片的な土器資料から大当原式・アカジャンガー式の土器型式を認定するには一定の制約が伴う。破片を分類する際には、土器型式の理解に不安定要素がある以上、結果的に両型式のどちらに該当するか判断を留保する必要も生ずる。

そこで、本稿では、まずアカジャンガー式の典型的特徴を認める資料を紹介し、続いてアカジャンガー式土器と共通の特徴をもつ大当原式段階とみられる資料、そしてその逆の資料(大当原式にも共通した特徴をもつアカジャンガー式段階とみられる資料)について類例資料も示しながら紹介していきたい。

まず、口唇刻目を施す口縁部資料をみると、連続的に工具をあて、等間隔に刻目を施すケース：図5-1～3(1-4・2-3・4)が最も多く一般的である。中には細沈線による刻目：図5-4～6(1-36・2-2・5-4)、同資料中で配置が「ハ」字状になる例は、これが製作者の意図的な意匠なのか、施文工程の結果そのような配置となったものか不明だが、同島内の具志原貝塚出土土器にも類例を認める。ナガラ原東貝塚の資料中に見出せないが、刻目の配置に間隔を空けて対峙的に施す例(熱田貝塚5層、具志川島遺跡群Ⅶ-Ⅸ層)、指頭や太めの工具を押し当て波状に施す例(兼久原貝塚)など、施文形態にバリエーションがみられる。全体的傾向として、口唇刻目は後続のフェンサ下層式段階ではほぼ消失しており、当該時期の平底土器群ではアカジャンガー式土器に主として認められる属性だが、先行型式にあたる大当原式段階を主体とする遺跡でも口唇刻目はみられるため、アカジャンガー式に限られた施文手法ではない。

刻目突帯文については、図5-7・8(2-28・6-6)がその代表的な例として挙げられる。当該

型式の標識資料であるアカジャンガー貝塚出土土器に類例のあるもので、口唇刻目を施した口縁下数 cm の位置（頸部付近）に刻目を伴う横位突帯を一条めぐらし、鋸歯状沈線を充填的に施文する。

当該資料にみる器面調整は、器外面はナデ調整の徹底により平滑に仕上げられているのに対し、内面調整はナデ消しが徹底しておらず工具ナデ（刷毛目状調整）の痕が残る。刻目突帯は横位単体の構成ばかりでなく、縦位突帯とともに「⊥」状構成の区画文様帯とするもの：図 5-9（3-37）、口縁端から頸部付近にかけてミミズ腫れ状の粘土貼付文が付され刻目が施される例：図 5-10（7-4）もみられる。

沈線文単体施文ではその施文意匠からアカジャンガー式段階とみられるものの、およその器形や器面調整の傾向差も窺い得ない破片資料の場合、大当原式・アカジャンガー式の土器型式別に分類するには情報量も乏しく、保留的に扱わざるを得ないものもある。

標識資料（アカジャンガー貝塚出土土器）では出土例が皆無でないものの、ナガラ原東貝塚出土土器では一定程度の個体数を認める印象的な有文土器として、刺突文や横捺刻文・爪形文や波状文・鋸歯文以外の文様意匠を施した資料が散見される。

刺突文や横捺刻文は、3つの施文パターンがみられる。

一つめは口縁直下に口縁に沿って沈線文を配し刺突文が口縁下に廻らせるもの：図 5-13・14（3-5・6）。

二つめは、刺突文単体を波状または鋸歯状に口縁下に描く際の文様要素として用いるもの：図 5-15（4-7）。

三つめは、口縁下文様帯の区画文様として用いるもの：図 6-1・2（3-41・8-3）である。また、稀な施文例として平底底部の側面に刺突文を廻らすものもある：図 6-3（3-44）がある。

この他にも沈線によって数本の線が交差あるいは対称に描かれ、やや幾何学的な文様を描く一群が存在する。図 6-4・5を挙げておく。図 6-6は無文の壺で調整等より大当原式か、図 6-7～9（2-42・5-35・52）は壺でいずれも有文の資料である。概して本遺跡出土の壺は文様が施文される事例が多いように見受けられるが、これが本遺跡あるいは時代的な特徴なのかどうかについては、検討を要する。

施文例を中心にアカジャンガー式の特徴を見てきたが、無文甕形においては図 6-10（1-18）のように底部を欠落するも概ね器全形を窺え得る資料が若干得られている。

なお、図 6-11（5-21）は不詳の土器で、突帯を施す口縁に接し円弧状に配置する。器全体の調整は徹底し精製され均整のとれた甕器形となる。類する資料は管見の限り思い当たる資料は無いが、やはり系統的にはアカジャンガー式土器に関連する資料と推察される。また、ナガラ原東貝塚では片口土器と報告される資料：図 6-12～15（1-62・2-43～44・5-55）も一定程度の個体数を認め本遺跡の特徴の一つとして注視される（村上1998）。

なお、アカジャンガー式土器の一群と推量されるものの、無文土器でやや指頭圧痕が認められる資料群がある。本遺跡における無文土器の大勢はこの特徴をもっている。これらの土器は、清水貝塚やナガラ原西貝塚などのような尖底土器にも類するものが多く、全器形がうかがえない場合はその型式分類は不安定とならざるをえない。具体的には図 7-1～4（1-17、2-30・31、3-25）が挙げられる。特にこの種の資料は、口縁端部を整え断面方形状にするものが多く認められ、報告中の口縁部分類のⅡ類として注視している（柴田2010）。この一群には、しばしば口縁端の外側に粘土が押し出されるように張り出すものもみられる。

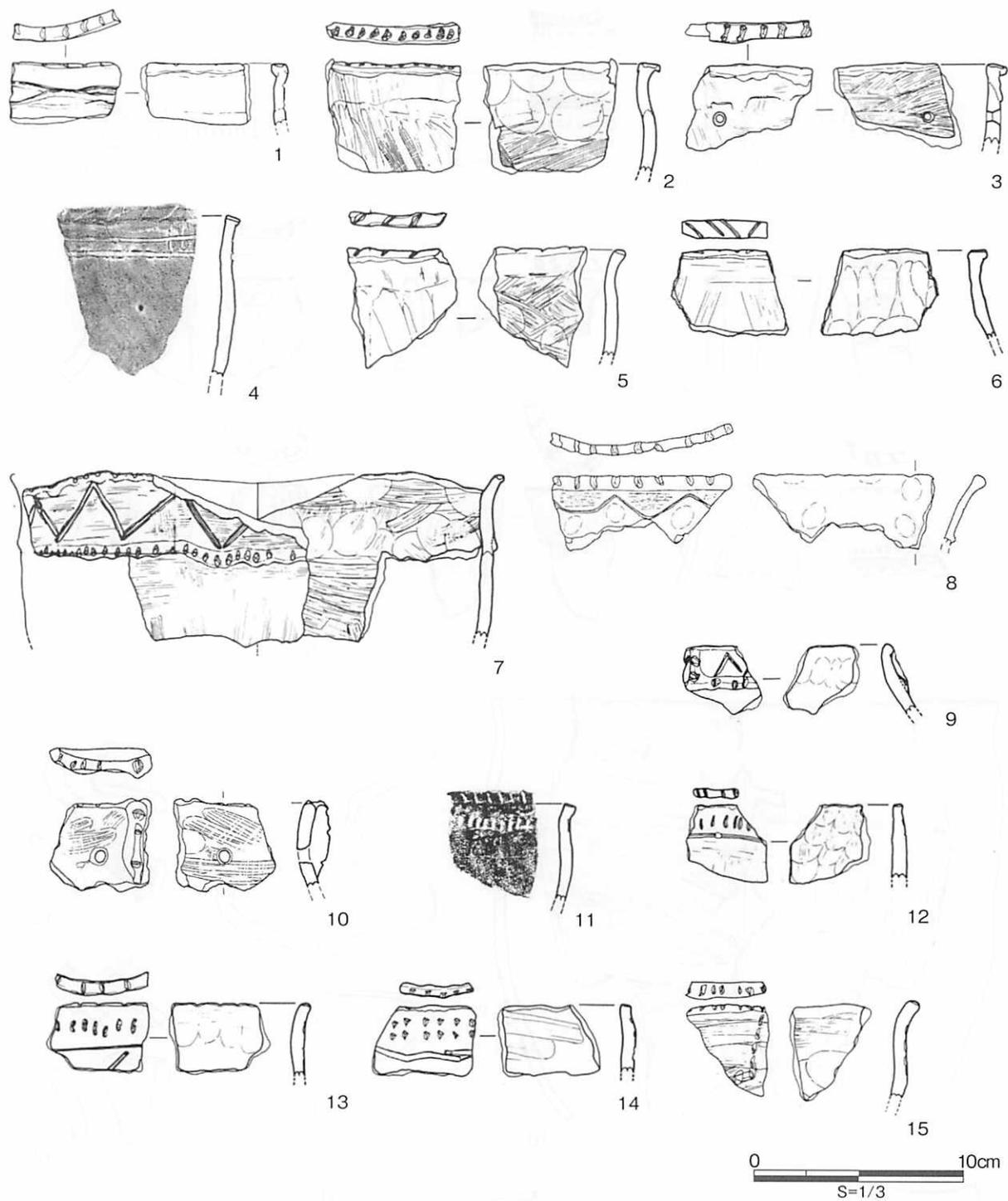


図5 ナガラ原東貝塚出土土器にみるアカジャンガー式土器及び関連資料

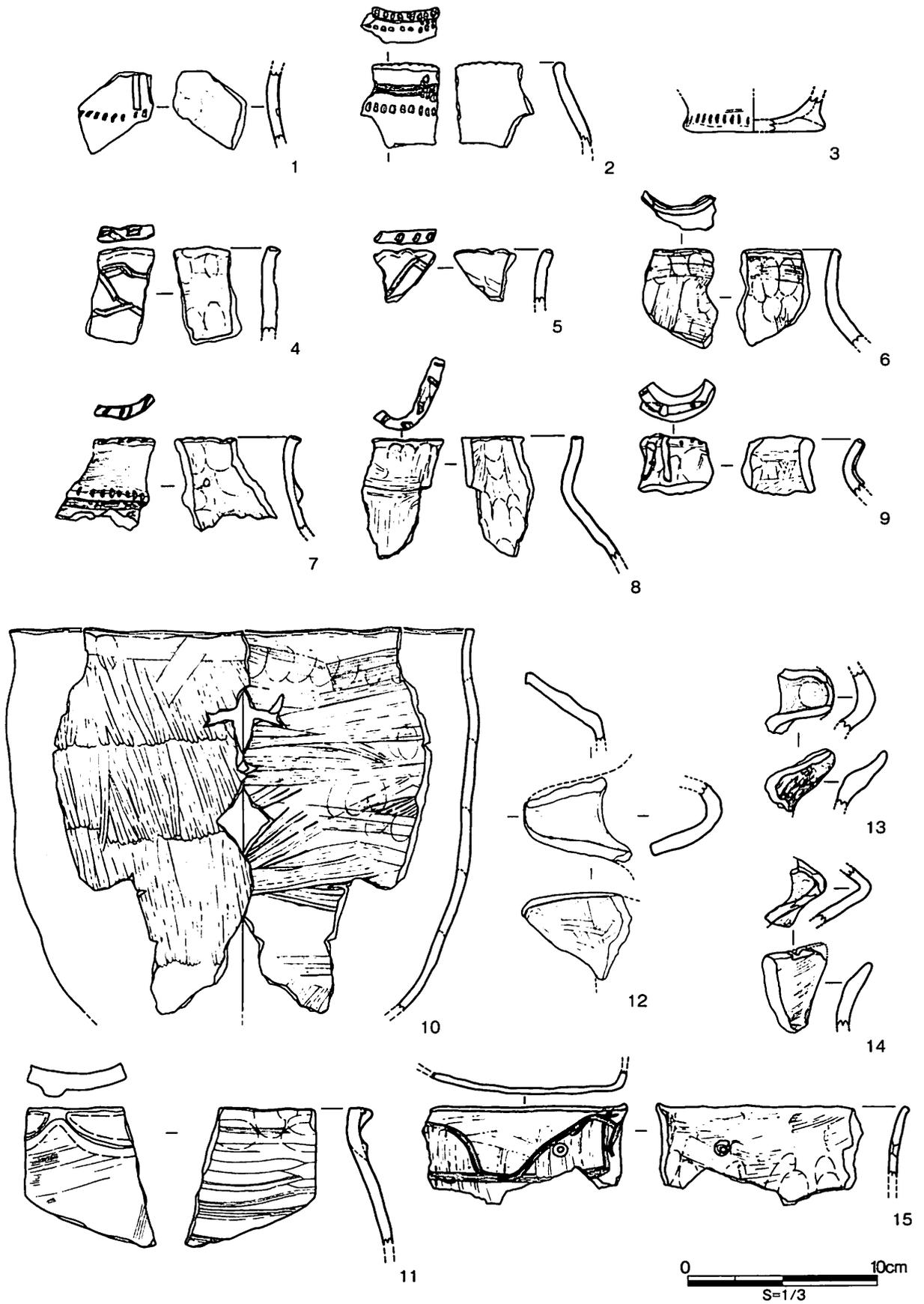


図6 ナガラ原東貝塚出土土器にみるアカジャンガー式土器及び関連資料

### 3.4. 尖底・平底両土器群の中間的な土器

前項まで尖底土器群と平底土器群を構成する既往の土器型式に同定可能な資料を紹介した。尖底土器群は、大当原式土器あるいはその系譜関係にあると類推される尖底土器群終末段階の土器であり、平底土器群も一部不詳の土器資料を含むものの、おおそアカジャンガー式土器に該当すると考えられる。但し、これまで紹介した土器資料についても断片的資料であるため今後の資料蓄積により形式的な位置付けが覆らないとも限らない。現時点における既知の土器資料との比較による分類である。

以下、どちらの型式とも言及が難しい、いわば形式的解釈を留保する土器として2つのグループの土器資料を紹介する。本稿では仮に尖底・平底両土器群の中間的な土器と扱い、その上で筆者の所見として尖底土器群と平底土器群のいずれに該当する可能性があるか言及する。

**A群** 器全体の調整方法や器形は概ね大当原式土器に近いものの、口縁部は外反し、口縁は刻目、刺突で施文する一群がある。図7-5～7（5-5・6-50）は、大当原式段階の、施文が施された土器の可能性が高いものとする。

**B群** 器形として、頸部は窄まらずに胴下半より直線的に口縁に至りほぼ最大径が口縁になる資料がある：図7-8-12（1-13、3-28・32、8-9、5-18）。器面調整が粗雑ならば、あるいは尖底土器群と解せられるが、当該資料はその殆どが器表面を丁寧にナデ調整しているためどの型式か判断は難しい。器表面にナデ調整を徹底する尖底土器群といえ、大当原式に先行する浜屋原式土器があるが、図上では似るものの、器壁の厚さや器内面に指頭痕による凹凸は殆ど認めず工具を用いた調整を行う点などから、大当原式でも新段階の時期あるいはその延長上（アカジャンガー式併行）と推測される。

上記A群を出土する遺跡としては、具志原貝塚がある。口縁刻目、刺突それと細沈線は尖底単純である清水貝塚やナガラ原西貝塚でも認められる。ただ、いずれの遺跡でも施文例は限られ、同じ分類として認めうるものも少数である。最も類似する資料を認める具志原貝塚は尖底も平底も出土する遺跡で、仮にこれを過渡期の様相として認めうるのであれば両土器様式交代期にみる過渡的な様相として注視していきたい。

一方B群を出土する遺跡は、やはり具志原貝塚がある。加えて兼久原貝塚、米須貝塚も類品が多いが両遺跡とも表採資料であるため判然としないが、平底土器が主体となる遺跡が多く、これらの資料は器形的には大当原式ともみられ、外面ナデで内面粗造な様相から浜屋原式とも見まがう可能性はあるが、胎土や調整の方法などから大当原式新段階ないしアカジャンガー式に属するものと判断されるものである。B群は、貝塚後期土器を包括するような一般的な特徴から破片のみでは判断は難しいものの、アカジャンガー式の初期段階と予察しておく。

## 4. 尖底土器群と平底土器群の共伴関係をめぐる解釈

尖底土器群と平底土器群の関係について、既に述べたように沖縄諸島の遺跡にみる層位的出土状況からその時間的先後関係は確実である。では二者の様式交代はどのような過程を経たのだろうか、また交代期前後の土器にはどのような特徴が観取できるのか。

沖縄諸島地域の遺跡で同一層内において尖底及び平底の両土器群が共伴する例は複数認められ、併存関係の可能性を否定することは難しい。むしろある一定程度の時間幅において併存関係にあったと解釈するのが妥当な理解とも思える。ナガラ原東貝塚にみる出土状況は、この理解を支持し得る事例ではないだろうか。

一方、ナガラ原東貝塚でも出土遺物から導かれる主体時期を遡る時期の遺物が僅量ながら認められ

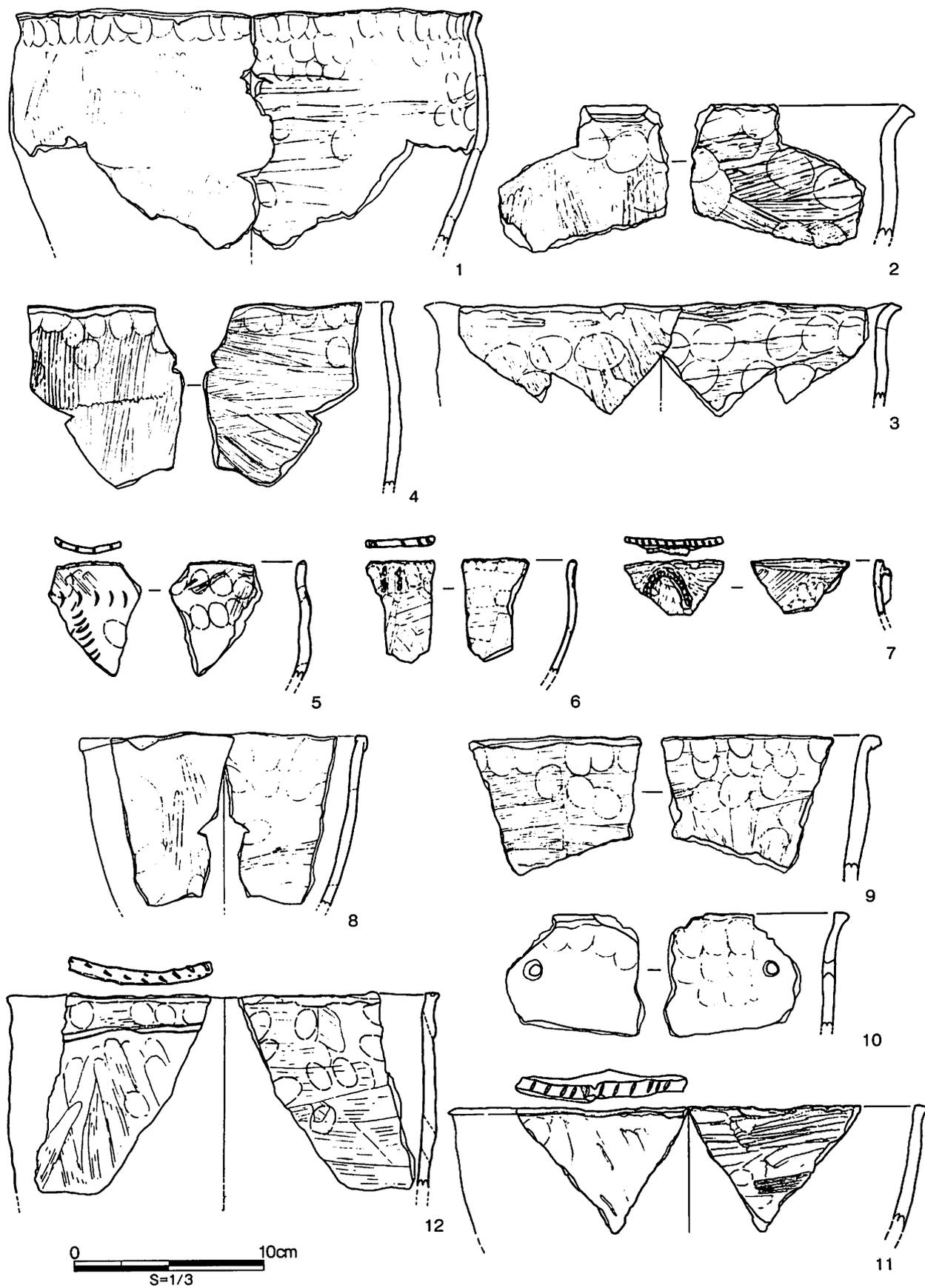


図7 ナガラ原東貝塚におけるアカジャンガー式土器及び中間的様相の土器群

る。従前の土器編年観では尖底土器群単純期に該当するもので、平底土器群と併存関係にあったとは考え難い資料も含まれる。具体的には、九州系弥生土器の影響を認める奄美諸島系土器（弥生系土器）や浜屋原式土器の可能性のある土器、そして内外面調整が粗雑でいわば典型的な大当原式土器の特徴を認める尖底土器も、これまでの貝塚時代後期土器の理解から平底土器群とは時期的に離れた土器であり、埋没過程等の要因によって伴ったものと考えている。

尖底土器群と平底土器群の様式交代について考える場合、その過程として尖底土器群の集団がある段階で平底土器を製作使用したことによる、または、尖底土器群の集団の後に別集団である平底土器群の集団が（遺跡形成場所に）入ってきたか、のどちらかと考えられる。土器の製作・消費・廃棄の結果形成された遺跡において、ある程度の時期幅をもって両者の土器群が出土する状況は当然あり得る。

出土遺物を絶対年代ではなく、出土状況から相対的に時間的先後関係の序列化をおこなう考古学上のいわば史資料化のための編年作業と、出土遺物の実態を動的に捉える共時的様相の断面の理解という、若干異なる土器資料の解釈（視点）が、しばしば過渡期段階にみる土器動態の理解の進展を阻んできた面もある。これは数千年単位の時期を対象とした場合と、ナガラ原東貝塚のように千数百年前の一土器型式について考える場合における時間尺の差違に因る問題ともいえよう。このような土器資料解釈をめぐる問題として具志原式土器が挙げられ、かつて筆者らも具志原式については保留的立場をとった経緯がある（岸本ほか2000）。その際の理由は以下のとおりである。

「具志原式土器」は尖底土器から平底土器への過渡期を象徴する土器群と推定され、具志原式は数型式に分けられることが指摘されるが（高宮<sub>1996</sub>）、胎土・焼成・文様など区分困難な近似する資料群で構成され現在まで細分に至っていないのが現状である。類例資料は清水貝塚、ナガラ原西貝塚、アカジャンガー貝塚などが挙げられると考える。近似資料を出土する遺跡の土器様相は尖底・平底の二大別が可能であり、今後の検討によって具志原式の細分とその型式差を抽出することが急務となろう（岸本ほか2000：140-141）。

つまり、尖底土器と平底土器の共伴関係は過渡期的様相と留保しつつ、両者にみる器形的な差異は基本的には時間的先後関係に因るもの、すなわち時期差を顕すものではないかと考察した。そこには具志原式土器の型式設定における内容が貝塚時代後期土器における特徴の殆どを包括的に含んでおり、長期に及ぶ複数の土器型式を包括する可能性が高く、設定者自身も「(将来的に)数型式に分けられることが妥当」（高宮<sub>1996</sub>）と上記の可能性に言及していることから、これに賛意したものである。

具志原式土器が比定される暫定編年後Ⅱ期は、具志原貝塚において九州南部系の山ノ口式土器が共出したことから弥生時代中期並行と認識された。尖底と平底の両土器群を認める具志原貝塚出土土器の特徴について次のようにまとめられている。「壺形、尖底と平底、後者はくびれ平底が特徴。口縁部がわずかに外反し、胴のあまり張らない器形が一般的。有文と無文があり、後者が圧倒的に多い。無文のものには直口状、つまり胴部から上が花針状に開くのではなく、ほぼ垂直の方向をとるものが多い。文様は数種認められるが、口唇部にのみ刺突文を施すもののほか、頸部に曲線文や凸帯文を施すものが相対的に多い。曲線文は断続するものや不規則な曲線を描くものが多い。」（高宮<sub>1978</sub>：18）

現在も尖底土器と平底土器の共伴関係について過渡期的様相と留保する考えに大きな変更はない。その主な理由として、具志原貝塚の上記の土器群には、その後の土器研究により型式的内容が認知されてきた浜屋原式土器や大当原式土器が含まれており、これを分離することは、設定者自身の「数型式に分けられることが妥当（高宮1996）」の見解に沿うものと考えている。おそらく、この型式分類された在地土器（浜屋原式）と弥生中期の九州系弥生土器が共伴したものと推される。一方で、これ

を除く「甕形のくびれ平底土器。口縁部がわずかに外反し、胴のあまり張らない、器形。有文と無文があり、後者が圧倒的に多い。文様として口唇部にのみ刺突文を施すもののほか、頸部に曲線文や凸帯文を施す」という特徴は、おそらくは平底土器群即ちアカジャンガー式土器と解される。しかしそれでも、口縁部資料から大当原式ともアカジャンガー式とも類別が難しい一群がまだ存在することは本稿でも既に述べたとおりである。理由は幾つかあるが、断片的で器形プロポーションなど型式差を顕す情報量に一定の制約を伴い、型式の認定が難しいということもその一因である。但し、この類別が困難な土器資料中には、過渡期段階の土器様相の一端を示している可能性もあり、先に尖底・平底両土器群の中間的な土器とした資料は、その候補として挙げておきたい。本稿における不詳土器A・B群は、沖縄諸島下の既知資料でも全形を窺い得る例に恵まれておらず、器全形も判然としないが、A群は尖底土器に伴うアカジャンガー式の文様をもつもので、B群は調整などに尖底土器的な特徴を認めるものも平底土器群に近しいものではないかと予察する。そして、当該土器の類例が多くある遺跡事例として具志原貝塚がある。このような土器を多出する遺跡は、尖底と平底の両者が認められ、アカジャンガー式土器に先行ないしは、アカジャンガー式の前段階的な様相が窺える土器群といえる。かつて「具志原式」の名称を与えられたが、前述したように将来的には分類すべきとの立場を支持したい。

ただ、ナガラ原東貝塚における出土傾向は下位層においては尖底土器が多く、上層になるにつれて平底土器も認める（村上1998）。各層における両土器群の共伴関係を、どの程度の時間幅で捉えるかについては、あらかじめ解釈提示の必要もあり、筆者らの立場としてはこの時間幅をむやみに引き延ばすのではなく、なるべく尖底の土器群とくびれ平底の土器群の単純の様相をもって両土器の過渡期の時間幅を短時間にする作業が必要と考える。暫定的措置として、両土器群のなかで各土器資料を類別・評価しながらも、過渡期的な土器消費の様相として両土器群の共時性についても資料解釈の一つとみておきたい。

以上、尖底土器群と平底土器群の同一層序内での出土例についての解釈については、かつて宮城（2003）が示したパターンから大きく変更はない。

- ① 攪乱・混在：深鉢（甕）形土器は尖底→平底の型式変化を追い、同一層で出土することはあくまでも攪乱・混在している。
- ② セット（器種）：例えば深鉢の尖底と甕の平底土器として器種として同一地域内で製作され、尖底と平底の両器形がセット関係となった。
- ③ 移入土器：沖縄地域が尖底器形の時期に平底器形のグループとの交流があり搬入土器として持ち込まれた。
- ④ 集団間交流：沖縄島には尖底器形を持つ集団と平底器形を使用する集団の2つの集団がある時期に併存し、集団の交流によって両土器型式が共伴して出土した。

①～④のパターンの組み合わせによって詳細を検討した上で、今一度尖底土器とも平底土器とも判断が難しい、いわば「宙に浮いた」土器資料の一群を過渡期段階の様相を顕すものとして捉え、本稿で中間的な土器群（A群・B群）及び尖底製作の延長上にある外観上平底土器などを抽出した。将来的には、例えば中間的土器群A群は大当原の一形式、B群は平底土器群の一形式として昇華されるものと予察する。しかし、全形を窺え得る資料が確認できない現時点では拙速なので、あらためて器全体が観察できる関連資料の出土や良好な一括出土事例をもって形式的検討（分類）を行いたい。

## 5. おわりに

最後に出土層位を確かめながら、ナガラ原東貝塚出土土器が沖縄諸島地域の土器編年研究に寄与し得る部分について触れ、まとめに代えたい。

ナガラ原東貝塚の主たる遺物包含層は、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層に分けられる。

Ⅴ層は尖底土器群主体であり、刻目突帯を持つ例が皆無な状況から、帰属時期は大当原式土器のある段階までと推される。本稿中でも触れた大当原式古段階とみられるいわゆる大当原貝塚下層タイプとは異なり、伊江島ナガラ原西貝塚や久米島清水貝塚、久高島シマシーヤーマ貝塚などの出土土器にみられる当該型式でも新段階の土器群に時的には近いと考える。九州南部系搬入土器が同層で得られていることから古墳時代前～中期が並行関係の一つの定点となろう。僅かながら浜屋原式土器の特徴と共通する資料や九州系弥生土器の影響をみる奄美諸島系土器の可能性もある土器も表採資料等にあるが、Ⅴ層に帰属していたものと解すると整合的である。

対して、Ⅲ層では刻目を伴う貼付突帯をもつ資料が一定量得られており、底部資料についても平底が多くある出土状況から、既往の土器型式に照らせばアカジャンガー式土器の段階とみられる。筆者等の理解では、Ⅲ層で得られた尖底土器の一部あるいは大部分は攪乱等で混在した状況であり、Ⅴ層帰属の土器も多分に含まれていると解釈する。

残るⅣ層の土器様相はどのようなものかと考えるか。ヒントになるのは、既往の土器型式と照らし作業仮説的に抽出した中間的な土器である(図7)。これらの土器群については伊江島具志原貝塚や久米島北原貝塚、米須貝塚の出土土器に類例資料を認める。他方、尖底土器群と理解し得る資料中にもアカジャンガー式土器段階の文様意匠に類似したものが幾つかあり、底部成形過程の観察においても尖底土器製作技術の延長上とみられる平底土器を複数見出した。このことは、Ⅴ層ないしⅣ層のある段階で尖底土器群を製作消費していた集団が平底土器も使用し始めたこととみられ、ある段階で尖底土器から平底土器へと形状をシフトさせていったものと理解できないだろうか。その時間幅は長く見積もっても数十年の時間尺で変化したものと推測している。奄美諸島地域で兼久式土器の成立後に沖縄諸島地域の土器文化に影響が及びアカジャンガー式が成立したとの解釈もあるが(池田1999)、尖底土器群のなかに後続する平底土器群と共通する文様要素が認められることから、尖底土器群の最末期段階に奄美諸島地域の脚台系沈線文土器群の影響を受け製作された平底土器が存在し、これが続く平底土器様式の祖形となった可能性もあるのではないだろうか。

本小論では、ナガラ原東貝塚出土土器を通して、沖縄貝塚時代後期の土器研究を多少なりとも明るくすることができればと考えまとめたものである。

貝塚時代後期のある一時期について、一定の問題点と課題点を明らかにし、土器文化の空間的・時間的対置の中で、少なからず土器様式交代期の枠組みのヒントを提供できたのではないかと思う。今回紹介した土器において土器様式交代期を考える上で重要な幾つかの土器をピックアップした。これを果たしてどのように定義づけるか、型式設定するのかしないのか、今後更に検討されるべき必要性を説いたつもりである。微力ながら本小論は、その糸口として土器編年を整理するきっかけを作ることができ、ナガラ原東貝塚の調査がこれを大きく引き寄せたものと考えている。

### 注

- (1) また、尖底土器群にしばしば弥生土器が伴うことが判明しており、これらの土器群はおおよそ弥生時代に並行する沖縄の在地土器と理解されている。加えて、近年奄美諸島においても九州弥生時代及び沖縄諸島尖底土器群並行段階の土器として奄美諸島の在地土器群もより具体的に検討されるに至り、沖縄諸島における搬入土器の影響

## 第Ⅱ部

下に製作されたと考えられていた土器の中には、奄美諸島の在り土器が含まれるのではないかと現在理解されている。具体的には、筆者らが沖縄諸島や奄美諸島で出土するいわゆる弥生系土器（安座間2000）や表裏面に文土器（宮城1998）とした一群が奄美諸島より沖縄諸島に持ち込まれた土器と考えている。

(2) 兼久原貝塚で開元通寶及び貝札、具志川グスクで貝札、勝連城跡四の曲輪北側地点では開元通寶が出土している。

### 文献

安座間充 2000「琉球弧からみた弥生時代併行期の九州との交流様相－当該期搬入土器群及び「弥生系土器」の再検証を中心に－」『地域文化論叢』第3号 pp.1-46 沖縄国際大学大学院地域文化研究科

安座間充 2001「アカジャンガー式の文様分類」『アカジャンガー式土器の再検討－沖縄後期土器研究会・熊本大学考古学研究室ジョイント学習会－』pp.11-14 沖縄後期土器研究会・熊本大学考古学研究室

池田榮史 1999「沖縄貝塚時代後期土器の編年とその年代的位置づけ－奄美兼久式土器との関わりをめぐって－」『第2回奄美博物館シンポジウム サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学－』pp.41-58 名瀬市立奄美博物館

上村俊雄・本田道輝 1984「沖永良部島スセン當貝塚発掘調査概要」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究－科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書－』pp.12-22 鹿児島大学法文学部考古学研究室（『鹿大考古』第2号に再録）

岸本義彦 2006「沖縄諸島貝塚時代後期の尖底土器と平底土器－遺跡における水平分布と垂直分布－」『先史琉球の生業と交易2－奄美・沖縄の発掘調査から－』pp.153-156 熊本大学文学部木下研究室

岸本義彦・西銘 章・宮城弘樹・安座間充 2000「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジアの人と文化－高宮廣衛先生古稀記念論集－』（上巻） pp.131-152 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

木下尚子 1989「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学－横山浩一先生退官記念論集－』pp.203-249 横山浩一先生退官記念事業会

木村龍生編 2002「ナガラ原東貝塚4」『考古学研究室報告』第37集 熊本大学文学部考古学研究室

呉屋義勝 1989「真志喜安座間原第一遺跡 安座間原第二遺跡」『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市教育委員会 pp.64-79.

柴田 亮 2010「土器」『考古学研究室報告』45、pp.13-20 熊本大学文学部考古学研究室

柴田 亮編 2012「ナガラ原東貝塚8」『考古学研究室報告』第47集 熊本大学文学部考古学研究室

新里亮人編 2001「ナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第36集 熊本大学文学部考古学研究室

新里貴之 1999「南西諸島の弥生時代並行の土器」『人類史研究』第9号、pp.75-106 人類史研究会

新里貴之 2000「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化－高宮廣衛先生古稀記念論集－』（上巻）、pp.153-173 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

新里貴之 2004「沖縄諸島の土器」『考古資料大観12 貝塚後期文化』、pp.203-212 小学館

新里貴之 2008「琉球縄文土器（後期）」小林達雄編『総覧縄文土器』、pp.822-829 （株）アム・プロモーション

高梨 修 1999「いわゆる兼久式土器と小湊・フワガネク（外金久）遺跡出土土器の比較検討」『第2回奄美博物館シンポジウムサンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイをめぐる考古学・歴史学－』、pp.19-40 名瀬市立奄美博物館・名瀬市教育委員会

高梨 修 2005『ヤコウガイの考古学』ものが語る歴史10 同成社

高梨 修 2005「小湊フワガネク遺跡群第一次調査・第二次調査出土土器の分類と編年」『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群I－学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書－』、pp.91-134 名瀬市教育委員会

高梨 修 2006「琉球弧におけるいわゆるスセン當式土器の検討－古墳時代並行期の奄美諸島における土器編年」『陶磁器の社会史 吉岡康暢先生古希記念論集』、pp.102-118 吉岡康暢先生古希記念論集刊行会

- 高梨 修 2008「古代並行期における奄美諸島の在り土器編年」『古代中世の境界領域 -キガイガシマの世界』、pp.257-284 高志書院
- 高松あゆみ・弘中正芳編 2010「ナガラ原東貝塚6」『考古学研究室報告』第45集 熊本大学文学部考古学研究室
- 高宮廣衛 1960「具志川村アカジャンガー遺跡調査概報」『文化財要覧』、pp.1-29 琉球政府文化財保護委員会
- 高宮廣衛 1978「沖縄諸島における新石器時代の編年（試案）」『南島考古』第6号、pp.11-22 沖縄考古学会
- 高宮廣衛ほか 1993「読谷村大当原貝塚発掘調査概報」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』17、pp.1-32 読谷村立歴史民俗資料館
- 高宮廣衛 1996「具志原式土器」『日本土器事典』、p.79 雄山閣
- 谷 直子編 2000「ナガラ原東貝塚4」『考古学研究室報告』第35集 熊本大学文学部考古学研究室
- 槻 佳克編 2003「ナガラ原東貝塚5」『考古学研究室報告』第38集 熊本大学文学部考古学研究室
- 中園 聡 2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器 - 様式の同定と解釈 -」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』（上巻）、pp.111-130 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 中園 聡 2004「東アジアの視座に立った弥生時代の再解釈 - 九州・南西諸島・朝鮮半島・中国 -」『沖縄対外文化交流史 - 考古学、歴史学、民俗学、人類学の視点から -』、pp.75-121 日本経済評論社
- 中村 愿 1988「沖縄諸島における縄文時代晩期相当の様相」沖縄考古学会・鹿児島考古学会第2回合同研究会テーマ『縄文時代晩期土器』、pp.21-30 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
- 中村友昭 2006「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」木下尚子編『先史琉球の生業と交易2 - 奄美・沖縄の発掘調査から -』、pp.157-169 熊本大学文学部木下研究室
- 中村直子・上村俊雄 1996「奄美地域における弥生土器の型式学的検討」『人文学科紀要』44、pp.47-61 鹿児島大学法文学部人文科学
- 中山清美 2006「兼久式土器分類試論 - 奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に -」木下尚子編『先史琉球の生業と交易2 - 奄美・沖縄の発掘調査から -』、pp.171-178 熊本大学文学部木下研究室
- 藤江 望編 1999「ナガラ原東貝塚」『考古学研究室報告』第34集 熊本大学文学部考古学研究室
- 松崎友理編 2011「ナガラ原東貝塚7」『考古学研究室報告』第46集 熊本大学文学部考古学研究室
- 宮城朝光・ほか 1977『島嶼の考古』創刊号沖縄国際大学考古学研究会
- 宮城弘樹 1997「弥生時代並行期の沖縄在り土器の編年」『沖縄考古学会定例会発表要旨』
- 宮城弘樹 1998「貝塚時代後期土器の研究（Ⅰ） - 部瀬名貝塚出土表裏面有文土器資料に着目して -」『名護博物館紀要 あじまあ』第8号、pp.41-54 名護市博物館
- 宮城弘樹 2003（口頭発表）「沖縄出土のアカジャンガー式土器及び前後の土器型式と年代観」『伊江島・ナガラ原東貝塚とアカジャンガー式土器前後の編年観をめぐって』（発表要旨）：沖縄県立埋蔵文化財センター
- 宮城弘樹 2005「沖縄貝塚時代後期土器の研究（Ⅲ） - 浜屋原式土器とその概念整理 -」『廣友会誌』創刊号、pp.13-26 廣友会
- 宮城弘樹 2009「沖縄貝塚時代後期土器の研究（Ⅳ） - 大当原式土器とその概念整理 -」『廣友会誌』第5号、pp.19-34 廣友会
- 宮城弘樹・安座間充 2002「沖縄諸島における弥生時代並行期の土器」『沖縄諸島の弥生時代並行期』（2002年度沖縄考古学会研究発表要旨・資料集）、pp.1-23 沖縄考古学会
- 村上浩明 1998「考察」『考古学研究室報告』34、pp.16-17 熊本大学文学部考古学研究室
- 盛本 勲 1994「久米島・大原第2貝塚B地点の発掘調査」『考古学ジャーナル』No.373、pp.30-33 ニュー・サイエンス社
- 矢持久民枝 2003「広田遺跡出土貝符の検討 - その分類と編年 -」『種子島廣田遺跡（本文編）』、pp.311-328 広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館